

日本史新発見

～あの出来事の最新事情～

河合 敦氏
Atsushi Kawai

歴史作家・歴史研究者。多摩大学客員教授。早稲田大学非常勤講師。『世界一受けたい授業』（日本テレビ系）などテレビ出演多数。歴史の意外なエピソードの紹介や分かりやすい解説に定評がある。著書に『世界一受けたい日本史の授業』『日本史は逆から学べ』『逆転した日本史』など。

第5回

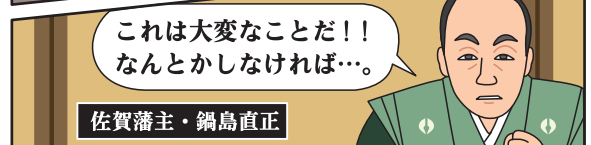
給付金もあった!? 江戸の感染症対策

依然として世界中で新型コロナウイルス感染症が猛威を振っています。そこで今回は江戸時代の為政者がどんな感染症対策を講じてきたのかを歴史的に考察していきます。

享和3年(1803年)3月に風邪が大流行したとき、幕府は江戸の困窮家族1人につき250文を支給しています。まさに定額給付金です。250文は現在の3000～5000円程度。4人家族ならそこその金額です。その狙いは社会の安定でした。十数年前には天明の飢饉で生活苦に陥った人々が米屋や商家を襲い、数日間江戸市中は無政府状態になりました。この混乱により老中・田沼意次の政権は崩壊しました。同じ轍を踏まないように、定額給付金で貧しい者たちの人心をなだめようとしたのだらうと考えられます。

さて、今回のコロナ騒動でもさまざまなフェイクニュースが流れていますが、江戸幕府はそうしたデマを厳しく取り締まりました。元禄元年(1688年)に「ハロリコロリ」という奇病が流行した際には、「馬が人の言葉を話す」というデマを流して人を集め、病除けのお札や怪しい薬の処方箋を売った者がいました。幕府はこの犯人を捕らえ、処刑しているのです。あまりに厳しい気もしますが、デマが社会を動揺させ、結果として政権にダメージを与えることを知っていたのです。

天然痘は古代より致死率の高い感染症として畏怖されてきましたが、佐賀藩主・鍋島直正はオランダから取り寄せた牛痘を嘉永2年(1849年)になんと我が子・淳一郎に接種。そして副作用がないと分かるとそれを藩内に広げているのです。同じく水戸藩主・徳川斉昭も身分にかかわらず希望者に種痘を施し、その数は約1万3000人に及んだといわれています。天然痘の脅威が薄れた頃、今度はコレラが猛威を振るい始めました。江戸では2度にわたるパンデミックで数え切れないほどの死者を出しました。当時、頻発した地震や台風と相まって、コレラは幕府の寿命を縮める一因になったといわれています。このように、感染症にうまく対応できないと政権の崩壊につながる恐れがあり、だからこそ江戸時代の為政者たちは、その対策に力を注いできたのです。



ちょこっと旅ガイド



【佐賀城本丸歴史館】 JR九州・長崎本線佐賀駅から徒歩25分またはバス10分

佐賀城本丸歴史館では、天然痘の対策としてオランダから取り寄せたワクチンや種痘に使われたY字形の二股針、当時の種痘の様子が描かれた絵画が展示されています。2017年には、この建物の北側に鍋島直正公の生誕200周年を記念した像が建てられ佐賀城公園のシンボルとなっています。